

社会学部論集 第45号 (2007年9月)

マックス・ヴェーバーとハイデルベルク大学

——人事案件・教育活動・同僚たち—— (7)

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

ヴェーバーは1902/03年冬学期にいったん復職したが、その学期の演習を完遂できず、三通目の退任（降格）願を提出し、大学と政府はようやくこれを認める。その後任人事においては、アルトホフの介入とバーデン文部官僚の意向とによってゾンバルト招聘が阻止される。そのさいラートゲンとヴェーバーとの確執が顕在化する。最終的に、ラートゲン、ヴェーバー、バーデン本省の三者間で折り合いのつく唯一の候補だったゴートハインが招聘されることになるが、ゴートハイン自身も、アルトホフとの確執を抱え、ボンからハイデルベルクへの脱出を図っていた。

キーワード ヴェーバー、ゾンバルト、ラートゲン、アルトホフ、ゴートハイン、ハイデルベルク大学

I 序

II 1896年のマックス・ヴェーバー招聘人事をめぐって

【II-1～5〔以上第39号〕II-6・7〔第40号〕】

III 国家学・官房学部門の開講科目とヴェーバー

IV 国家学・官房学部門のスタッフ補強の試み〔以上第41号〕

III （補足・訂正）

V 1900年のカール・ラートゲン招聘人事をめぐって

【V-1～3（途中まで）〔以上第42号〕V-3（続）～7〔第43号〕V-8】

VI （幻の）ヴェーバー・ラートゲン体制と1902年の退任（降格）願〔以上第44号〕

VII 1902/03年冬学期における復職と1903年の退任（降格）願

VII-1 1902/03年冬学期における復職

ヴェーバーの休暇は1902年秋まで延長されてきた。これにたいして、1902/03年冬学期にかんしては復職・在勤扱いになっている。このことについて、筆者は、前回分を執筆した時点で、つぎの三つの史料状況から判断していた。

第一に、前章で述べたように、この学期に彼が実際に演習を敢行しようとした形跡が顕著に認められ、この演習にかんする大学会計掛の記録用紙も作成されている。

第二に、この学期の前までの4学期間（1900/01年冬学期から1902年夏学期まで）は、ヴェーバーから哲学部への休暇（延長）願、哲学部から大学特別評議会への休暇（延長）申請記録、大学特別評議会の休暇（延長）承認記録、ヴェーバーから本省への休暇（延長）願、本省の休暇（延長）承認記録が遺されている。ところが、1902/03年冬学期にかんしてはこうした記録がいっさいみあたらない。もしもこの学期にも大学教授の休暇および講義免除という人事上の重要案件があるならば、その記録を大学も政府もかならず保存しておくものである。また、大学側の資料保存状態はあまり良好でないが、政府側の資料保存状態はきわめて良好であり、後年これにかんする文書のみがまとまって脱落した可能性もほとんどない。したがって、この学期における休暇延長申請そのものがなかったと考えるべきである。

第三に、この学期に続く1903年夏学期にかんして、ヴェーバーはふたたび休暇を申請し、認められているが、その関連文書中に「延長する（verlängern）」という——ないしそれに類する——表現がない。1901年夏学期から1902年夏学期までは、休暇の「延長」であることが各文書中に明記されているのに、1903年夏学期の関連文書にそうした表現がないということは、この学期の休暇が、延長されてきた休暇ではなく新規休暇であることをしめしている。したがってこのことはまた、1902/03年冬学期に休暇が途切れたことをしめしている。

前回稿では、以上のことから、1902/03年冬学期にヴェーバーは休暇を返上したと判断した。そしてこれを脱稿した後、筆者は、新たに判読しおえた文書中に、この件にかんする決定的な証拠を発見した。それは、1903年6月4日付のバーデン法務・文部省内文書（草稿）であり⁽¹⁾、そこには、ヴェーバーの病歴と授業免除との関連について、つぎのように明記されているのである（GLA235/2643）。

1898年夏学期末に、教授・博士ヴェーバーは神経系の障害に見舞われ、そのため、1898/99年冬学期中の教育活動を中止せざるをえませんでした。1900年夏学期に、病苦が新たに（von neu an）発症した後、われわれ〔バーデン法務・文部省〕は、1900/1901年冬学期にかんして同人に賜暇することを余儀なくされ、病状の推移が芳しくなく、その休暇は、陛下の御認可によって、1902/03年冬学期開始時まで3学期間延長されたのでございます。

この記述は、これまで本稿で第一次史料に依拠して考証してきたヴェーバーの病歴および教育活動の中断状況と完全に合致しており、1898年夏から1902年秋までの彼の病状推移にかんするきわめて信頼性の高い記述である。ここにおいて（1903年6月の時点において）、休暇延長は「1902/03年冬学期開始時まで（bis zum Beginn des Wintersemesters 1902/03）」の3回であったこと——つまり連続休暇は4学期間であったこと——が、その休暇を付与したバーデン本省によって確認されているのである。この史料によって、彼は1902/03年冬学期に休暇を取得しなかったという筆者の前回の推定が正しかったことが、疑問の余地なく確定した。

しかしまた、前章で指摘したように、この学期に彼が遂行しようとした演習は途中で挫折しており、そのことが、彼が再度退任願を提出する強い動機のひとつになっている。

VII-2 1903年の退任（降格）願とその承認

そこでつぎに、彼が政府宛に送付した三通目の退任（降格）願をみよう。これまでの二通の退任（降格）願によって、彼の意向はすでに大学と政府に重々伝えられているので、三通目は非常に短いものである。同日付で提出された1903年夏学期講義免除願もあわせて掲げる。

資料VII-① ヴェーバーの退任（降格）願③（バーデン政府宛，1903年4月16日付） (GLA235/2643)

ハイデルベルク，[19] 03年4月16日
大公国法務・文部省御中

謹んでお願い申し上げます，

陛下におかれましては，拙下の国務からの解任を実現させ，拙下を員外教員に列せられるご意向であることを。

その理由を付加しますと，拙下によるかつての同様の申請を，また（担当官）氏に書面および口頭にて説明いたしましたことを引照いたします。拙下の健康状態は，予見可能な時期に正教授の義務を果たすことを不可能にするものです。

敬具
教授マックス・ヴェーバー

資料VII-② ヴェーバーの講義免除願（バーデン政府宛，1903年4月16日付） (GLA235/2643)

ハイデルベルク，[19] 03年4月16日
大公国法務・文部省御中

拙下は，
この夏〔学期〕に予告いたしました講義の遂行を免除していただきたく存じます。

大公国貴省にお届けしました退任願との関連で，あえて付加いたしますと，現在の諸事情のもとでは，拙下が企図いたしました教育活動の再開よりも，この間予想をはるかに上回って顕著に増大した当該専門分野の文献を消化するほうが，理に適っていると思われます。

敬意を込めて
教授マックス・ヴェーバー

まず講義免除については，ヴェーバーの意向を受けて，1903年4月27日の大学特別評議会において，1903年夏学期における講義免除が認められ（UAH/RA824, S. 305），翌日付で，特別評議会から本省にたいして講義免除願が提出され，認められている（GLA235/2643）。

一方、正教授からの退任については、政府参事官フランツ・ベームがなおも慰留に努めたため、なかなか認められなかったとマリアンネは書いている（LB1: 275, LB2: 299）。しかし、4月21日付学部長（ラートゲン）回状においては、ヴェーバーの退任をやむをえないものとして哲学部が承認する意向がしめされ、翌日付で本省も学部にたいしてこれを了承し、学部は26日付で最終的な意思決定をなしている（UAH/IV-102/134）。さらに6月24日付で特別評議会宛に本省決定通知が送付され、ヴェーバーの正教授退任、および10月1日から彼を正嘱託教授に補任することが正式に決定されている（UAH/PA2408）。ヴェーバーは、6月29日付書簡において、退任にかんする本省の決定を受理したことを確認し、これは学長によっても確認されている（ebd.）。数年にわたって難渋したが、こうして事態はようやくヴェーバーの望むような解決の方向へと動いていくのである。

VII-3 退任（降格）の性格づけと年金辞退

ヴェーバーにとってもうひとつ気がかりなのは年金問題である。前号でも指摘したように、正教授からの通常の退任（Emeritierung, Pensionierung）となると、そこに年金が発生し、まだ四十歳にも満たない彼にたいして、今後長期にわたってバーデン政府が高額の年金を支給しつづけてはならなくなる。彼はこれを嫌い、年金を受けとらずに済ます方策を政府にたいして提案している。退任（降格）願③（資料Ⅶ—①）のなかで「国務からの解任」と「員外教員」への採用とがセットとして提案されているのは、「退職」ではなく「配置替え」だから年金支給の対象者にはならないという理由づけを政府にたいして与えるためである。このことを、彼は、退任を間近に控えた9月11日付本省宛書簡（マリアンネ代筆）においてあらためて明示している。そのなかで、Pensionierungの請願が問題なのではなく、「国務免除申請」（強調原文）、つまり「法的には、自由意思による国務待遇の取り消し」が問題なのであって、これにともなって「員外身分における使役」（この場合正嘱託教授への降格）を求めているのだと彼は強調している⁽²⁾（GLA235/2643）。さらに彼は、1903年11月22日付本省宛書簡において、自分は年金にかんしてなにも要求しないことを再度明言し、年金受給を固辞している（ebd.）。その趣旨について、彼は、ホーニヒスハイムに向かって、自分は大学のために尽くしていないのに年金を受けとることはできないと語っている（Honigsheim 1963: 167-168）。

ところが、安藤英治の依頼で、1903年秋におけるヴェーバーの処遇について調査したヘルマン・ヴァイゼルトは、安藤にたいして、ヴェーバーが同年に年金生活に入ったと誤情報を伝えている（安藤英治 1972: 143）。ヴァイゼルトのこうした誤認が生じたのは、彼が調べたヴェーバーの身上書（Standes-Liste, 大学側に保管されていたもの）には年金辞退にかんする記述が欠けているからである（UAH/PA2408）。まったく同様の身上書は政府側にも保管されており、こちらには年金辞退の事実が明記されているのだが（GLA235/2643）、ヴァイゼルトは大学側の資料しか調べなかったため気づかなかったのである⁽³⁾。

VII-4 大学教授の責務にたいするヴェーバーの態度について

筆者は、これまで、マリアンネの記述や、他の伝記記述——それは例外なくマリアンネの

記述に無批判に依拠したものである——を読んで、1900年秋の休暇取得から1903年秋の正教授退任にいたるまで、なにかヴェーバーが優雅に転地療養生活を送りつづけていたかのよう——またその間彼が大学の職務を放擲していたかのよう——印象をもち、そこに、大学人・職業人としての倫理・責任をあれほど重視していた彼の振る舞いとして大きな違和感を抱いていたのだが⁽⁴⁾、第一次史料に正対した結果、そこにマリアンネの描いていないヴェーバーの姿をみだし、その違和感を払拭することができた。

彼は、この時期にも、つねにハイデルベルク大学の職務のことを案じ、病身に鞭打ち、自己コントロールを試み、教壇復帰のための計画を練り、開講期にはハイデルベルクに戻り、ふたたび教壇に立とうと奮闘しつづけていた。線を引いて抹消された受講登録簿からは、なんとしても講義をおこなおうとしながらついにそれを果たせなかった彼の悲痛な心情を窺うことができる(UAH/Rep.27/1409)。そして講義はできなかったが、1902/03年冬学期には演習を敢行しようとし、他の時期にも私的・自主的なゼミ指導を実際におこなっていた。彼は、それぞれの時点において、自分に講義遂行能力がないと判断すると、そのつど正教授からの退任を申請し、正教授の職務を果たしうる有能な第二教授を招聘するために尽力し、自分自身は私講師または正嘱託教授に降格しながらひきつづきゼミ指導等を担当しようとしていた。そしてみずからの教壇復帰を当分の間見込むことができないと判断すると、彼は自分にたいする学部・政府の温情的対応を謝絶し、大学・学部・学生の利益を優先的に考慮して、決然たる態度で自分の正教授退任を承認させ、同時に自分の後任教授の選定がすみやかに実現するよう心を配っている。さらにそのさい分不相応な年金受給を固辞している。ヴェーバーは、この時期にもやはり大学人としてきびしい職業倫理と責任感の持ち主でありつづけたのである。

〔注〕

- (1) この文書は、法務・文部省がバーデン大公に宛てて提出した報告書の草稿であり、削除・加筆の跡が多い。直接の文書作成責任者はフランツ・ベームだと思われる。
- (2) ヴェーバーが、このように〈配置替えだから退職したことにはならず、したがって年金受給者に該当しない〉という論理を立て、しかもそれをその後実際に押しとおした(彼は現にバーデン政府から一マルクも年金を受けとらなかった)という事実は、とりもなおさず彼が1903年にハイデルベルク大学を退職しなかったことを意味している。
- (3) 安藤の記述によると、ヴァイゼルトはまた、1903年にヴェーバーがRuheprofessorになったので教壇には立たないことになったと誤情報を伝えたようであるが(安藤英治 1972: 143)、本稿ですでに詳論したように、ヴェーバーが1903年にHonorarprofessorになったのは、まったく逆に教壇に立つためである。ハイデルベルク大学の組織・制度史に精通しているヴァイゼルトがこうした初歩的な誤認をするとは考えにくいので、安藤がヴァイゼルトの説明をきちんと理解できなかったのではないかもしれないが、いまのところこの誤認の真相はわからない。
- (4) こうした違和感を増幅しているのが、エルゼ・ヤッフエが安藤英治に伝えたヴェーバーのつぎの言である。「ただ為すところなく窓辺に立ちつくし、終日悲しい思いに耽った」(安藤英治 1972: 153)。これは、彼が教壇に立てなくなり、ローマに滞在していた頃(1901～02年頃)のことを語ったものらしいが、この言の前後の文脈は不明であり、無限定に鵜呑みすることはできない。この証言にもかかわらず、いまあつかっている1900～03年頃のヴェーバーは、大学の職務を放棄して無為に時を過ごしている人物ではない。この頃、「終日悲しい思いに耽った」ことがたしかに一時的にあったにせよ、3年間ずっとそうだったのではない。

VIII 1903 年のエーベルハルト・ゴートハイン招聘人事をめぐって

VIII-1 伏線：カールスルーエ工科大学人事（1902 年）へのアルトホフの介入

ヴェーバーの正教授退任にともなって後任人事が発議される。この人事には、じつはアルトホフとゾンバルトとの確執が強い影響を及ぼしているのだが、残念ながら、この人事にかんする記録のなかに、アルトホフの介入を直接証拠立てるものはみつからなかった。そこで、まずアルトホフのゾンバルト観を知るために、傍証として、カールスルーエ工科大学の 1902 年人事記録を吟味し、それから翌年のハイデルベルク人事に取りかかることにしよう。

ゾンバルトは、カールスルーエ工科大学の経済学教授人事にさいして、筆者が確認したかぎりでは 2 回候補とされている。まず、ハインリヒ・ヘルクナー⁽¹⁾（1863-1932）が 1898 年にチューリヒに転出することになり、カールスルーエでは後任選考がすすめられる。そのときゾンバルトが第一候補に推され、とくに 1897 年 12 月 31 日付意見書において、ヘルクナー自身が強力に彼を推しているが、結局後任はヴァルター・トレルチ（1866-1933）に決定する（GLA448/2376）。さらに 1902 年に、今度はトレルチがマールブルクへと転出し⁽²⁾、その後任人事において、ふたたびゾンバルトが候補に推されている。

このときの候補選出はひどく難航している。内部文書によると、当初ゾンバルトが第一候補に推されていたが、ベルリン駐在公使からある報告文書が届けられたことによって、選出作業は困難な局面を迎える。公使ヤーゲマンは、1902 年 2 月 1 日付で、バーデン本国にたいして、アルトホフとエルスターの意向を伝えている。アルトホフの意見はもっぱらゾンバルトの人となりにかかわるものであり、そこにおいては、彼がゾンバルトをどのようにみていたのか、またプロイセン文部官僚である彼が他国（バーデン）の人事にたいしていかに介入したのかが赤裸々に語られている。ヤーゲマン報告中にまとめられているアルトホフの見解は以下の通りである（GLA235/4236）。

彼〔ゾンバルト〕の学問活動の当初において、彼はいくらか激昂しやすい男であり、今もなお完全に成熟したとは言えず、とりわけ場合によってはある種の虚栄心に駆りたてられて常軌を逸したふるまいに出ることがある。けれども、その性格からして話がわかる男であり、そのためある程度のことは避けられると自身が保証しているとのことである⁽³⁾。

彼の初期の著作は社会民主主義者たちに気に入られたが、たしかに彼がベルンシュタインに向かってマルクス学説を維持しがたいものだとして論証して以来、さらに彼が、シュモラーやヴァーグナーと協力して、わが母国の経済発展という理由から艦隊法案に賛成して公然とプロパガンダを敢行して以来、また社会主義者の集会にすら参加して以来、社会民主主義者たちは今では彼に激しく敵対している。

個人的経歴と同様、講師としても、彼は最高の世評をえている。彼はつねに正教授よりも二～三倍も多い受講生を獲得している。彼の講義はみごとで示唆に富み、同時に受講生の実証的な知識を基礎づけ、受講生たちは彼に熱心に付きしたがっている。プロイセンの文部行政機関は、正教授の任をすでに果たしている彼を正教授に任ずることに、たしかに

これまで躊躇してきたが、もしもわれわれ〔バーデン法務・文部省〕が彼を先に採用することをしないならば、彼をボンに招聘することを検討するだろう。

アルトホフは、第一に、ゾンバルトの激昂しやすい性格や、初期の社会主義的傾向をあげつらっている。第二に、現在の彼は社会民主主義者に敵対しているが、それにもかかわらず社会主義者の集会に参加していることも指摘している。第三に、プロイセンでは彼をボン大学に招聘する計画があることをほのめかしている。これは巧妙に張りめぐらされた奸計である。第一点と第二点とにおいて、アルトホフは、ゾンバルトの気質と社会主義的傾向の危険性を強調して、バーデン政府が彼にたいして猜疑心に駆られるように仕向けている。しかしそれでもなお彼をバーデン政府があえて招聘しようとする可能性をアルトホフは読み、今度は、プロイセン政府が彼をボンに招聘する計画があることを匂わせ、もしもバーデン側がゾンバルト招聘を強行すれば、バーデン法務・文部省とプロイセン文部省との関係が悪化することを示唆している。

アルトホフにここまで露骨に意思表示された結果として、バーデン政府側は、どうあってもゾンバルトを忌避せざるをえない状況に追いこまれた。そしてバーデン側は実際にアルトホフの思惑通りゾンバルトを忌避するのだが、だからといって、アルトホフは、もちろん彼をボン大学の正教授に任命しようとはしなかった。アルトホフは、ただバーデンを操るためにボン招聘話を持ちだしただけなのである。

この報告が届けられると、カールスルーエ工科大学の人事関連文書から、それまで候補者リストの第一番目に挙げられていたゾンバルトの名が消えている⁽⁴⁾ (GLA448/2376)。そして紆余曲折の末、ようやくオットー・フォン・ツヴィーディネク=ジューデンホルスト (1871-1957) が員内助教授として採用されている⁽⁵⁾ (GLA235/2686)。

この人事において、カールスルーエ工科大学とバーデン政府は、アルトホフの意向表明に翻弄され、迷走を繰り返している。かつてバーデンの文部行政機構は、大学側の意向に好意的だという点でプロイセンと対照的であったが、やがてドイツ各国の文部行政当局がプロイセンに臣従するというかたちで形成されたカルテルに組みこまれてしまったため、そうした特徴は失われたと、のちにヴェーバーは語っている⁽⁶⁾。このカールスルーエのケースにみるような混迷が、アルトホフを頂点とするその「カルテル」の生々しい発現様態である。そしてこうした事実を踏まえたときにはじめて、翌1903年のハイデルベルク人事にさいして何が生じていたのかを明瞭に理解できる。以下にその人事過程を検討するが、ここにおいてまたしても大きな波乱が生じている。およそ平穏な人事などというものはないのかもしれない。

VIII-2 ヴェーバーの意向とゾンバルトの失態

ヴェーバーは、ゾンバルトに正教授の地位を与えようと尽力しつづけている。これまでに筆者が確認できたかぎりでは4回、つまり1897年にヴェーバーがフライブルクからハイデルベルクへと転ずるときの後任人事 (Biesenbach 1969: 225)、1900年のハイデルベルク大学第二教授新任人事 (本稿で検討済)、今回のヴェーバー後任人事、そして1907年のラートゲン後任人事において⁽⁷⁾、ヴェーバーはゾンバルトをつよく推薦している。

ここでみる 1903 年人事においてもヴェーバーはゾンバルトを推している。ところが、このときゾンバルトにとってたいへん不利な状況が生じている。ゲオルク・フォン・ペロウは、この人事の年に、ある学会の席上でゾンバルトの『近代資本主義』にたいして意地の悪い批判をおこなったが、ゾンバルトは、それにたいして冷静な応答をすることなく、冷笑家ぶって得意がった。その場に居合わせたバーデンの省担当官は、ヴェーバーに向かって、「この印象はあまりにも悪すぎる。ゾンバルトはあなたの後任人事にはもはや問題になりえない」と語った（Honigsheim 1963: 168）。すでに前年のカールスルーエ工科大学人事においてアルトホフのゾンバルト批判を読んでいた担当官は、ゾンバルトの言動を直接みて、そこにたしかに——まさにアルトホフが描いたとおりの——激昂して感情的なふるまいに走る人物をみいだしたのである⁽⁸⁾。ここにゾンバルトの敗北は決定づけられた。

ひとつ注目すべきは、バーデンの省担当官（アルンスペルガーかベームだと思われる）が、この会議場に足を運んで直接ゾンバルトの品定めをしていることである。アルトホフは、人物を見定めるため、ときには直接その人物の講義にもぐりこみ、その一挙手一投足を観察することにしていた（潮木守一 1993: 27）。バーデンの官僚もまた、こうしたアルトホフ的偵察によって教授候補の評定をしているのである。こうした文部官僚の跳梁および彼らによる大学支配は、ヴェーバーの大学論・官僚制論の重要な考察対象である。このケースにおいても、バーデン政府の意向は、以下にみるように、ハイデルベルク大学哲学部教授会の議論に直接大きな影響を与えている。

VIII-3 教員候補推薦委員会および教授会における議論の推移

この人事にかんする教授会の内部資料が遺されている⁽⁹⁾。それによると、ハイデルベルク大学哲学部は、まずこの人事のために教員候補推薦委員会を編成している。6月27日付で、学部長ラートゲンは、委員会メンバーとして、ヴィルヘルム・ブラウネ、エーリヒ・マルクス、ヴェーバー、ラートゲンの4名を推薦し、承認されている（UAH/IV-102/135）。本稿ですでにみた 1896 年人事においては法学部教授2名も加わっていたが、今回は哲学部教授陣だけで委員会が編成されている⁽¹⁰⁾。

ラートゲンは、7月13日付で、政府に提出する推薦書の草稿を書いている。このなかで候補として挙げられているのは、記載順に、ゴートハイン、ゾンバルト、ヘルフェリヒ、ヴェンティヒの4名である。このうちヴェンティヒを推薦したのはまずまちがいにラートゲンである⁽¹¹⁾。他の3名の推薦趣旨は後出の推薦書浄書稿に示されているので、ここではヴェンティヒの推薦趣旨をみておこう（ebd.）。

4.〔第4番目の候補〕ハインリヒ・ヴェンティヒ、1870年生まれ、1895年にマールブルクで教授資格取得、1897年グライフスヴァルトの員外助教授、1899年同教授、1902年ミュンスター大学教授。多数の著作のなかから、つぎのものを挙げることができます。『オーギュスト・コントおよびその社会科学にとっての意義』1894年（処女作）、および『産業政策と中産層政策——オーストリアの史料にもとづく法制史・経済政策研究——』1898年、これは緻密な作品で、オーストリア自体においても盛んに称賛されました。近年、同人は、い

くつかの小論文、とりわけカルテルにかんするものを公刊しております。良心的な研究者であり、趣味のいい著述家であり、懇切な講師である彼は、あらゆる点で、人物の実力と個性とにおいて他の被推薦者と肩を並べております。

このように、ラートゲンはヴェンティヒの業績と人格を高く評価している。後出の推薦書浄書稿にみるように、他の3名にかんしてはいくつか留保事項を提示しているのに、ヴェンティヒにかんしては手放しの礼賛である。

ラートゲンは、この推薦書草稿の末尾に委員会の判断を記している。それによると、4名の委員は、ゴートハイン、ヘルフェリヒ、ヴェンティヒにかんしては全員一致で推薦している。これにたいして、ゾンバルトにかんしては、投票の結果、3対1で推薦することになった。ゾンバルト招聘に難色をしめした者が1名いたのである。

ところが、推薦書草稿におけるヴェンティヒの項目には鉛筆で抹消線が引かれている。そして彼の推薦は委員全員一致のはずなのに、後日の教授会議案において彼の名は挙げられておらず、他の3名のみの推薦となっている。いまのところ彼が外された理由が何だったのかは不明である。彼自身に、招聘を辞退すべきなんらかの事情があったのかもしれない。

こうしてこの案件が7月25日の教授会に上程されたところ、強い反対意見が出て議論は白熱した。議事録によると、ここで問題とされたのはもっぱら「ゾンバルト教授の人となり」(die Person des Prof. Sombart)であるから、これは、アルトホフの示唆とバーデン政府による難色表明とを受けた議論である。学部スタッフのなかからも政府側に迎合しようとする声が出て、ゾンバルトを候補者から外すべきだという意見が最後まで消えなかったのである。12名の教授会出席者中、発言したのはマルクス、ホープス、ヴィンデルバント、ヴェーバー、ブラウネ、シェル、ドゥーン、ハンペ、ラートゲンの9名であったが、議事録を書いたラートゲンは、誰がどういう態度を表明したかを慎重に伏せている⁽¹²⁾。この案件は結局投票に持ちこまれ、7対4(したがって棄権1)でゾンバルトも推薦することとなった(ebd.)。

この投票結果から判断すると、もともとヴェンティヒを推したかったラートゲンは、ゾンバルトを強力に推薦するヴェーバーに同調せず、消極的にふるまった模様である。というのは、もしも、国民経済学・財政学の教授が2名とも歩調を揃えてゾンバルトをつよく推薦していたならば、他の教授会メンバーはこの2名に比べると専門外の人々と言っていいから、専門家2名にたいする反対票が4票も入るとは考えにくいからである。

既述のように(本稿(6):19)、1900年にラートゲンが招聘されたとき、彼がアルンスペルガーにたいして恩義を感じていたことは明らかであり、今回の人事には彼の意向も反映されている。しかも彼はアルトホフの強い影響下にもある。その彼が加わったことがゾンバルト推挙の妨害要因になった可能性は低くない。つまり、ラートゲンは、アルンスペルガーをはじめとするバーデン政府とアルトホフとの意を汲んで、ゾンバルトに難色をしめしたか、あるいはすくなくとも教授会メンバーにたいしてゾンバルトを積極的に推薦しようとしなかったのではなかろうか。先の委員会における投票においてゾンバルトに反対した1名がラートゲンであった可能性、また教授会においてゾンバルト招聘に反対した4名のなかにも彼が含まれていた可能性を考える必要がある。あるいは棄権した1名がラートゲンであったのか

もしれない。

Ⅷ-4 哲学部の推薦書とゴートハインの招聘

紛糾した教授会の翌日、ラートゲンは推薦書を手直しして本省に送付している。それは以下の通りである。

資料Ⅷ-① 哲学部の推薦書（1903年7月26日付）（GLA235/3140）

大公国法務・文部省御中
ハイデルベルク大学哲学部

ハイデルベルク、1903年7月26日

国民経済学・財政学ポストの件

本年6月24日付第20.994号布達⁽¹³⁾にもとづき、哲学部は、謹んでつぎのようにご報告いたします。

教授・博士マックス・ヴェーバーの退任によって処理されるポストの再補任のために、本学部は以下にご推挙申し上げます。

1. ボンのゴートハイン教授
2. プレスラウのゾンバルト教授
3. ベルリンのヘルフェリヒ教授

1と3にかんしては全員一致でなされましたこの推挙の根拠として、私共は以下のような所見を申しのべます。

1. エーベルハルト・ゴートハイン、1853年生まれ、1878年以来プレスラウおよびシュトラースブルクの私講師、1885年から1890年までカールスルーエの教授、1890年以来ボンの教授。同人は、歴史研究に依拠して、文化史・経済史領域において、研究者としても著述家としても幅広い活動を展開してきました。同人の数多い著作中、国民経済学的研究の領域においてとりわけ傑出したものは、優れた『シュヴァルツヴァルト経済史』（第一巻1891/92年、第二巻近刊）およびラインラントにかんする農業政策研究であります。同人の豊饒な著作物は、その軽快な弁舌の才に呼応しております。同人は、まず基本的に歴史家として登場しておりますけれども、長期にわたる教育活動のなかで、当該専攻〔国民経済学〕の基礎講義を担当しており、近年はこの方面の講義にのみ限定しております。

2. ヴェルナー・ゾンバルト、1863年生まれ、ブレーメン商業会議所の法律顧問としての短期の勤務を経て、1890年以来プレスラウの助教授。本学部は、すでに1900年に同人の学問的意義と豊かな教育の才について陳述いたしました⁽¹⁴⁾。それ以降、同人は1902年に「資本主義」にかんする大著二巻を公刊しました。この著作にたいしてさまざまな反論がなされたのは、その主題〔資本主義〕の本性と、ゾンバルトのはっきりと特徴づけられた個人的独自性とに由来します。しかし、この著作が、包括的学術的活動の証であると同様、類まれな才能の証でもあること、つまり膨大な知識領域をたんに記述した証にとどまらず、

なによりもその領域を理論的に一貫させた証でもあることが、最高度に強調されなくてはなりません。

3. カール・ヘルフェリヒ, 1870年頃に生まれ⁽¹⁵⁾, 1899年以来ベルリンの(「教授」の称号を有する)私講師, 1901年以来外務省植民部の(「公使館参事官」の称号を有する)助手, かつ東洋学ゼミナールの教官。また, 彼はすでに1900年に本学部によってその名が挙げられております⁽¹⁶⁾。その当時すでに, 貨幣制度にかんする著作によって, 同人の理論活動の大きな才能が賞揚されており, それ以降, 同人は, 最近刊行された教則本『貨幣と銀行 第一巻 貨幣』(1903年)において, この才能をあらためて証明しました。同人の教育活動にかんする報告は, それを「有能な学生にとって卓越した」ものと述べております。もちろん, 他の被推薦者と比較して, ヘルフェリヒはこれまで非常に限定された程度においてのみその教育活動をおこなったにすぎず, 同人のこれまでの活動領域は, 署名者〔ラートゲン〕のそれと重なっているという懸念が生じるかもしれません。けれども, 同人が学問的方法を完全にわがものとしており, 若手のなかで明らかにもっとも傑出した逸材であることが決定的に重要であります。

学部長 K・ラートゲン

浄書がラートゲンの筆跡で, 署名も彼ひとりなのは, 推薦書の浄書・署名が学部長の職務だからであるが, やはり彼の意向がかなりつよく反映された文書とみることができる。すでにみた1900年人事の推薦書がヴェーバー色濃厚な文書であったのにたいして, この1903年人事の推薦書は明らかにトーンが変わっている。掲載順序はゴートハイン, ゾンバルト, ヘルフェリヒの順になっているが, これは年齢順であって, 推薦順位ではない。また1900年人事のように教育上の便宜から順位をつけることはなされていない。つまりこの3人には表面上いかなる序列もつけられていない。しかしよく読むと, ゾンバルトとヘルフェリヒにかんしては難点をそれとなく強調しているが, ゴートハインにかんしては, もともとと経済学者であるよりは歴史学者であるという一種の難点⁽¹⁷⁾を, 積極的に打ち消しにかかっているように思われる。こうした言い回しは, 7月13日付の草稿——それはラートゲンが自分の意向を表明したものと言える——においてすでに使われており, 「ヴェンティヒがだめならゴートハインを」というラートゲンの意向が透けてみえる。

またヴェーバーもゴートハインの業績を高く評価しており, バーデンの省担当官にたいして, 彼の高い能力を請けあっている(Honigsheim 1963: 214)。結局, ラートゲンとヴェーバーとが合意でき, またこの二人にバーデン本省も含めた三者間で折り合いのつく唯一の候補がゴートハインだったのであろう。

こうして, 3年前にハイデルベルク行きを阻止されていたゾンバルトは, 大著『近代資本主義』を引っさげて再挑戦したが, 今回も挫折を味わうことになった。既述のように, 1900年人事においても, ペロウのマールブルクにおける所作が誘因となって, ラートゲンとアルトホフの裏工作を招き, これによってゾンバルトはラートゲンに敗れていた——このことをゾンバルト自身は知らなかったが——。3年後に, 彼はまたしてもペロウとラートゲンとアルトホフにしてやられた模様である。そしておそらくペロウ自身は, 自分が二度にわたって

そのような狂言回しを演じたことにまったく気づいていなかったであろう。こうした意図されない——また予期されない——因果の皮肉な連鎖が人事案件を左右するのであり、そこに大学人事の問題性的一端が具体的なかたちでしめされている。

VIII-5 退任後の処遇にかんするヴェーバーの意向

ヴェーバーは、この人事過程と前後して、正教授退任後も自分が教授会にたいして影響力を発揮できるように、ある種の画策をしている。その当時マリアンネが書いた書簡によると、正教授退任（正嘱託教授補任）後も教授会におけるヴェーバーの発言権を確保するための文言をベームが学部宛文書中に挿入したのに、学部長がそれを理解しなかったので、ヴェーバーは激怒し、正嘱託教授の地位も講義委嘱も拒否しようとしたことがわかる（LB1: 276, LB2: 299）。彼女のこの記述からは、なにかヴェーバーがハイデルベルク大学の現場から離れようとしたかのようにもみえるが、じつは事態は正反対である。このことを第一次史料から検証しよう。

マリアンネが書いているベーム関連文書とは、1903年4月22日付本省通知第13354号のことである。これは、ヴェーバーの退任を承認する意向を哲学部が表明したのを受けて、学部 にたいして本省が出した内諾書という性格の文書であり、マリアンネの書簡記述と突きあわせて勘案すると、この内諾書の末尾の一文が、ベームによってあとから付けくわえられたものと判断できる。そこにはつぎのように書かれている（UAH/IV-102/134）。

教授・博士ヴェーバーと学部との今後の関係は、この決定〔正教授からの退任および正嘱託教授への配置替えを指す〕にさいして、貴学部においておそらく満足しうるかたちで築かれうることであろう。

この箇所を書いたベームが、ヴェーバーと学部との今後の関係について、ここで具体的に触れることを避けているのは当然である。なぜなら、正教授を退任した者が、その後も教授会に参加したり学部運営に影響力を発揮したりすることは、規則外かつ異例中の異例であって、本省として正式にそれを認知すべき事柄ではなく、あくまでもヴェーバーと学部との内々の諒解事項として処理するのが適切だからである。いかにもベテラン官僚ベームらしく、慎重に言葉を選び、この措置が異例であることを十分配慮して加筆している。

ところが、前記のように、マリアンネは、この配慮を学部長ラートゲンが無視したと非難している。実際にはどうだったかというと、4月26日付で、そのラートゲンを筆頭とする学部教授会メンバーは、ベームによる加筆を含む本省の内諾書にたいして返答しており、その末尾にはつぎのように書かれている（ebd.）。

このこと〔正教授からの退任および正嘱託教授への配置替えを指す〕にたいして貴省が企図なさった決定は、本学部にとりましてもっとも満足のいく解決策に思われます。

このように、ベーム提案にたいして、ラートゲンらも即座に同意しているのであり、マリ

アンネの非難は当たらないようにみえる。しかし、ベームは具体的なことはなにも書かなかったので、それをどのように解釈し、実施するのかは、ラートゲンらの現役学部執行部の意向にかかっている。したがって、この件にかんして、表向きはヴェーバーと本省と学部とのあいだで合意が成立したように見えながら、じつは——マリアンネが証言するように——ヴェーバーが正教授退任後も学部運営に係わることをラートゲンが嫌い、そのことにたいしてヴェーバーが憤激したとみるのが妥当であろう。

ここにみるように、ヴェーバーは、退任後も学部運営にたいしてなみなみならない意欲をしめしている。また当時のマリアンネの証言から、そのことをラートゲンは嫌っていたと判断できる。本章でみたヴェーバー後任人事の紛糾をはじめとして、ヴェーバーとラートゲンとのあいだには確執が生じており⁽¹⁸⁾、ヴェーバーからみれば、ラートゲンが信頼できない以上、今後も自分が哲学部および国家学・官房学部門（国民経済学領域）のために働かなくてはならないことになる。正教授退任後の学部運営への関与という異例の措置を求める彼の一見奇妙な言動は、そうした危機感・使命感の表出である。そして彼は、その後長年にわたって、実際にハイデルベルク大学哲学部とのあいだに緊密な関係を維持しつづけるのである。

VIII-6 ゴートハイン、ヴェーバー、ラートゲン

これまでの考証から、アルトホフの意向に方向づけられてゾンバルトが忌避され、ゴートハインが招聘されたことを確認できる。ところが、当のゴートハイン自身にとって、ボンからハイデルベルクへと転ずる動機は、皮肉なことに彼とアルトホフとの確執であった。

ゴートハインは、1897年から1898年にかけてボン大学の学長を務めており、そのさい、アルトホフによる支配からの大学の独立性を公然と擁護するようになり、そのため彼はアルトホフから嫌悪されていると感じていた (Becht 1990(2): 60)。さらにハイデルベルクへの移籍にさいして、彼は実際アルトホフから侮辱めいた扱いを受けたい (ebd.: 62)。しかしこうした経緯もあって、彼は思いのこすことなくハイデルベルクへと向かうことになった。また彼にとってひとつ幸いだったのは、彼の長年の論敵であるディートリヒ・シェーファールが、彼の着任前に入れかわるようにハイデルベルクからベルリンへと去っていたため、ハイデルベルク側において彼の招聘を妨げる要素がこれとってなかったことである (ebd.)。

ゴートハインは、1903年11月23日付で、バーデン政府高官にたいしてかなり長い書簡を書きおくっている。そのなかで、彼は、経済学と文化史学との双方にわたる彼の講義案にたいして、ラートゲンとヴェーバーの全面的同意がえられたことを喜び、文化史学関連では、エーリヒ・マルクス、カール・ハンペと詳細な協議をおこなったことを報告し、新しい職務にたいする意欲をしめしている。また自分が、『イグナチウス・デ・ロヨラ』『南イタリア文化発展史』『シュヴァルツヴァルト経済史』『十九世紀におけるライン航路の歴史的発展』の著者として学部の教授たちから認知されていることを誇らしげに語っている。さらに、「自身による国民経済学と文化史とのこうした〔彼の諸著作にしめされているような〕結合を学部諸兄が望んでいたこと」を強調しており、この招聘が彼にとっていかに祝福されるべきものであるかを明らかにしている。またそのさい、かつてミュンヘンの経済史・文化史教授だったヴィルヘルム・ハインリヒ・リール (1897年死去) の後任として候補に挙げられたこ

とをとくに付記し⁽¹⁹⁾、こうした文化史学という——この当時まだ学問領域としてかならずしも認知されていなかった——領域の教育活動に従事することの困難をあえて吐露し、今回の招聘が自分にとっていかに貴重な僥倖であるかを力説している⁽²⁰⁾（GLA235/3140）。

ゴートハインの着任は、ヴェーバーにとって念願の——しかしヴェーバー自身は果たすことのできなかった——正教授二人体制が実質的にはじめてスタートすることになったという大きな意義がある。また、ゴートハインが着任する1904年は、ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を雑誌に発表しはじめる年でもあり、この著作は新しい同僚の研究から大きな刺激を受けていた⁽²¹⁾。ホーニヒスハイムはつぎのように述べている。「当然このカルヴィニズム研究者〔ヴェーバー〕は、その対極すなわちカトリシズムの反宗教改革（対抗改革）にも精通していた。これにかんしては、すでにまず第一に彼の同僚・友人ゴートハインとの交友が与っていた」（Honigsheim 1963: 250）。

一方ラートゲンは、ゼミをゴートハインと合同で開講している（AdV）。もともと彼が1877年から1879年まで在学していたシュトラースブルク大学のゼミはシュモラーとクナップの合同ゼミであったし、日本から帰国した彼は、一時ベルリン大学でシュモラーのゼミのアシスタントを務めていた（野崎敏郎 2005: 178）。合同ゼミという形態は、彼にとって好ましいものだったのであろう。またこれは、歴史研究と経済学との結合という彼とゴートハインとが共有するスタンスが、両者の緊密な関係を醸成した結果ともみることができる。

（第Ⅷ章完）

〔注〕

- (1) ヘルクナーが1888年にフライブルクに員外助教授として招聘されるさいにも、彼とアルトホフとのあいだに問題が生じていた。これについては拙著を参照（野崎敏郎 2005: 190-191）。ヘルクナーは、1892年にフライブルク大学から転出し、カール・ビューヒャーの後任としてカールスルーエ工科大学の正教授になっている。このときヴァーグナーは、ビューヒャーに宛てた書簡のなかで、カールスルーエの後任候補を挙げつらねている。そのなかでは、ヘルクナーのほか、ミヤスコフスキ、マイア、オルデンベルク、ラートゲン、ハースバッハ、ゾンバルト、ゼーリングに比較的多くの字数が費やされている（Rubner 1978: 269-270）。
- (2) 1900年にマールブルク大学教授ラートゲンがハイデルベルクへと転出した後、その後任はなかなか選出されず、マールブルク大学は、他大学の教員を臨時に起用して、かろうじて必要な授業遂行を切りまわしていた。そしてようやく二年後になってトレルチを招聘している。したがってトレルチはラートゲンの後任である。この後任人事が難航したのは、既述のような事情から（本稿(5): 54-56）、アルトホフが、マールブルク大学にたいして人事上の報復を図り、ラートゲンの後任をなかなか任命しようとしなかったためではないかと思われる。
- (3) 「けれども、その性格からして話がわかる男であり、そのためある程度のことは避けられると自身が保証している」という箇所は間接話法になっている。これは、この報告を書いているヤーゲマンからみた間接話法であり、アルトホフがヤーゲマンにたいして語った言い回しをほとんどそのまま引用したものであろう。
- (4) この人事においては、ハイデルベルク大学員外助教授カール・キンダーマンも候補に挙げられ、ヴェーバーから推薦状が届けられている（GLA448/2376）。ヴェーバーはキンダーマンをあまり評価していないのだが（MWGII/5: 570, Honigsheim 1963: 223-224）、それでも彼をホーエンハイムの農業大学に推薦し（Honigsheim, a. a. O.: 224）、彼は1906年にその正教授に就任している。それに先立つ4年前にも、ヴェーバーは彼のために推薦状を書いているのである。
- (5) ツヴィーディネク＝ジューデンホルストは、この翌年には正教授に内部昇任している。彼は1920年にプレスラウの教授へと転じ、さらに1921年には、前年亡くなったヴェーバーの後任としてミュンヘン大学に招聘されている。

- (6) これはドイツ大学教員会議の席上におけるヴェーバーの発言である。この発言は新聞種になって物議を醸した。また現職のハイデルベルク大学正嘱託教授によるドイツの大学行政への批判的発言であることから、バーデン政府も神経をとがらせており、政府とヴェーバーとのあいだでこの件にかんして書簡が交わされている (GLA235/2643)。この発言の原文はつぎの議事録に収録されている。*Verhandlungen des IV. Deutschen Hochschulehrertages zu Dresden am 12. und 13. Oktober 1911. Leipzig: Verlag des Literarischen Zentralblattes für Deutschland (Eduard Avenarius). 1912, S. 71.* 上山安敏他編訳 1979: 138。
- (7) 当初、この1907年人事についても本稿で扱うつもりであったが、諸般の事情から割愛することにした。1907年6月18日付推薦書において候補とされたのは、ゾンバルト、ヘルクナー、アルフレート・ヴェーバーの3名であるが、ほかにフライブルクからゲルハルト・シュルツェ＝ゲファールニッツを招くことも検討されていた (GLA235/3140)。結局このときヴェーバーの弟が採用されたのだが、ヴェーバー自身はむしろゾンバルトを招きたかったのかもしれない。
- (8) この会議場の出来事をみていたホーニヒスハイムもまた、ペロウとゾンバルトとの冷笑的な議論の応酬に失望している (Honigsheim 1963: 168-169)。
- (9) こうした内部資料が遺されているのは珍しく、貴重である。この当時の哲学部長はラートゲンであり、ヴェーバーの評言によると、彼は非常に几帳面な人物であったから (Honigsheim 1963: 224)、学部運営にかかわる資料をきちんと保存しておいたのであろう。実際、彼が学部長だった1902年秋から1903年秋までの資料を収めた哲学部資料ファイルは、他の年のものと比較してかなり分厚いものである。また教授会の議事録もラートゲン自身が詳細に書いており、このことにも彼の几帳面さがしめられている。
- (10) 本稿(1)(2)において詳細に検討したように、1896年人事(クニースの後任人事)においては、委員会に法学部教授を加えていた点とともに、当該領域の唯一の専門家であり、しかも当該ポストの占有者でもあるクニース自身を排除している点にも大きな特徴があった。これはむしろ1896年人事の異常な性格をしめしているのであって、ここにみる1903年人事のように、専門性を考慮しつつ哲学部スタッフによって委員会を構成するのが通例だったと思われる。ラートゲンが委員として指名したのは、当該ポストの占有者であるヴェーバーと、当該領域のもうひとりの教授であり、学部長でもあるラートゲン自身と、当該領域に関係の深い歴史学領域の教授であり、経済にもくわしいマルクスと、元学部長であり、1896年人事にも加わっていたブラウネであり、この委員会構成はまったく理に合った妥当なものである。
- (11) ヴェンティヒは、1896年に、マールブルク大学私講師としてその学問キャリアを開始している。このとき同大学に勤務していたラートゲンは、1895年9月30日付書簡において、アルトホフにたいしてヴェンティヒを強力に推薦していた (DZA/Rep.92/149/2)。よく知られているように、ヴェンティヒは、のちに、ラートゲンの東京時代の門下生・金井延の要請を受けて、東京帝国大学に勤務することになる (河合榮治郎 1939: 186-187)。さらに第一次世界大戦中には、対ベルギー政策立案のために、ヴェンティヒとラートゲンとは協力協働しており、ラートゲンが家族に宛てた大戦中の書簡中には、協力者としてヴェンティヒの名が出てくる (個人所蔵文書)。またヴェンティヒらが編集した『ベルギーの経済』に、ラートゲンは「植民地保有」を寄稿している (Rathgen 1918)。
- (12) たいへん興味深いのは、休暇取得中(1903年夏学期)でありながら、ヴェーバーが、教授候補推薦委員会のみならず、教授会にも出席して発言していることである。案件が自分の後任人事だからということもあるが、この時期のヴェーバーがけっして大学運営の現場から離れていなかったことを明瞭にしめす重要な事実である。
- (13) ここで引き合いに出されているのは、本省から哲学部に宛てて、すみやかに教授候補を推薦するよう指示した布達である (UAH/IV-102/135)。
- (14) 1900年人事における哲学部の推薦書のことを指す。これはすでに本稿中に訳出した (本稿(4): 51-53)。
- (15) ヘルフェリヒは1872年生まれである。
- (16) 注(14)に挙げた推薦書のことを指す。
- (17) 実際、バーデンの省担当官は、はたしてゴートハインが経済学・歴史学の多岐にわたる講義をほんとうに担当できるのかを疑っていた (Honigsheim 1963: 214)。
- (18) すでに前号で紹介したように、ヴェーバーは、ラートゲンにかんして、「その几帳面さとけっして

羽目を外さないその流儀とによって、結局は人の神経を苦しめる」と評している（Honigsheim 1963: 224）。今号でみたように、ヴェーバー後任人事において、ラートゲンは、アルトホフやアルンスベルガーの意向等に振りまわされ、右顧左眄しながら迷走した模様である。ゾンバルトとは対照的に、温厚で慎重居士のラートゲンは、その煮えきらない態度や判断力不足といった点で、ヴェーバーの信頼をうるにはいたらなかったであろう。

- (19) このミュンヘン人事において、ゴートハインの熱望に反して、リールの後任はゲオルク・フォン・マイアに決定した（Becht 1990 (2): 60）。
- (20) 実際、ゴートハインは——アルトホフとの悶着もあって——ハイデルベルクが気に入ったらしく、1907年にラートゲンとともにハンブルクから招聘されたのを謝絶し、結局亡くなる直前までハイデルベルクに勤務することになる。しかし、もちろんゴートハインのハイデルベルク時代がすべて順風満帆だったわけではなく、また彼とヴェーバーとのあいだにはスタンスの違いがある。これについてはベヒトが言及している（Becht 1990 (2): 63）。
- (21) これにかんしては牧野雅彦の適切な指摘を参照（牧野雅彦 2006: 109）。

〔史料・文献〕

- AdV: *Anzeige der Vorlesungen, welche auf der Grossherzoglich Badischen Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg gehalten werden sollen*. Heidelberg: K. Groos/ J. Hörning
- Becht, H-P. 1990: Prof. Dr. Eberhard Gothein (1853-1923). *Karlsruher Transfer*, 4 Jg., Nr. 6 u. 7
- Biesenbach, F. 1969: *Die Entwicklung der Nationalökonomie an der Universität Freiburg i. Br. 1768-1896; eine dogmengeschichtliche Analyse*. Freiburg i. Br.: E. Albert
- DZA/Rep.92/149/2: Deutsches Zentralarchiv, Rep. 92, Althoff, B. Nr. 149, Bd. 2. Geheimes Staatsarchiv preußischer Kulturbesitz
- GLA235/2643: Grossherzogthum Baden. Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Diener Dr. Weber Karl Emil Maximilian. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA235/2686: Ministerium des Kultus und Unterrichts. Techn. Hochschule. Diener. Zwiedineck Edler von Südenhorst, Dr. jur., Otto Hellmut Wilhelm. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA235/3140: Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Dienst. Die Lehrkanzel der Staatswirtschaft, Finanz- und Polizeiwissenschaft, und die Besetzung der Bestellung. Nationalökonomie. 1821-1930. Teil 1. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA235/4236: Republik Baden. Ministerium des Kultus und Unterrichts. Polytechnische Schule. Dienste. Die Lehrstelle für Volkswirtschaft für die Assistentenstelle am staatswiss. Institut an der polytechnischen Schule, 1864/1922, Teil 1. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA448/2376: Technische Hochschule Karlsruhe. Berufungen. Unterricht. Besetzung des Lehrstuhls für Volkswirtschaftslehre. Generallandesarchiv Karlsruhe
- Honigsheim, P. 1963: Erinnerungen an Max Weber. *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 15. 大林信治訳 1972 『マックス・ウェーバーの思い出』 みすず書房
- LB1: Weber, Marianne 1926: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 1. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
- LB2: Weber, Marianne 1926/50: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 2. Aufl. Heidelberg: Schneider. 大久保和郎訳 1963 『マックス・ウェーバー』 みすず書房
- MWGII/5: *Max Weber Gesamtausgabe, II, Bd. 5, Briefe 1906-1908*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) , 1990
- Rathgen, K. 1918: Der Kolonialbesitz. H. Gehrig u. H. Waentig (Hrsg.), *Belgiens Volkswirtschaft*. Leipzig: B. G. Teubner
- Rubner, H. (Hrsg.) 1978: *Adolph Wagner; Briefe, Dokumente, Augenzeugenberichte 1851-1917*. Berlin: Duncker & Humblot
- UAH/IV-102/134: Akten der Philosophischen Fakultät 1902/03 II. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/IV-102/135: Akten der Philosophischen Fakultät 1902/03 III. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/PA2408: Personalakten. Weber, Karl Emil Max 1897-1920. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/RA824: Universität Heidelberg. Engerer Senat Protokollbuch 1894-1909. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/Rep.27/1409: Akademische Quästur. Philosophische Fakultät. Prof. Dr. Weber Max. Universitätsarchiv

Heidelberg

安藤英治 1972『ウェーバー紀行』岩波書店

上山安敏・三吉敏博・西村稔編訳 1979『ウェーバーの大学論』木鐸社

潮本守一 1993『ドイツ近代科学を支えた官僚——影の文部大臣アルトホーフ——』中央公論社

河合榮治郎 1939『金井延の生涯と学蹟』日本評論社

野崎敏郎 2005『カール・ラートゲンの日本社会論と日独の近代化構造に関する研究』(科研報告書)

牧野雅彦 2006『マックス・ウェーバー入門』平凡社

〔付記〕

本稿は、平成 18-19 年度科学研究費（基盤研究（C）（2））の助成を受けた個人研究の成果の一部である。手稿類の探索およびその判読のためにご助力を賜った各公文書館のスタッフの方々に深謝する。

（のざき としろう 公共政策学科）

2007 年 4 月 11 日受理

